

「次世代目録所在情報サービスの
の在り方について(中間報告)」
について

慶應義塾大学文学部

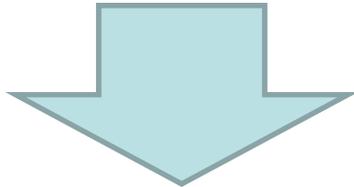
原田隆史

中間報告全体の印象

- 目録所在情報サービスの問題点と方向性について、適切なまとめがされており秀逸
- 特に、各項目における問題点の指摘は優れた現状のまとめともなっている
- 将来の方向性については、奇をてらわず穏当で実現可能な案が列挙される

目録所在情報サービスの利用者

現在，利用中の(大学)図書館
現在は利用していない各種図書館
図書館以外の機関および個人



- 現在の参加館以外からの将来的な利用をどの程度想定するのか
- 「共同分担目録」の枠組みに，どこまでこだわるのか

NACISIS-CAT/ILLの役割

- 過去20年間, NACISIS-CATが存在したから実現できた図書館システムの発展
- 複雑で独自性の高い書誌データ構造と, 比較的平易なエンコーディング方式
- 社会の変化に, 柔軟に対応できるのか?
 - 標準化
 - 国際化
 - Web2.0 etc...

目録データの交換？提供？

図書館コミュニティ以外へのデータ提供
API公開も含めたデータの提供



発生源入力としてのMARCデータの利用

一方的な提供や利用は多い
データの交換は例外的なもの？

共同分担目録

共同分担目録の作成は誰のためか

- 「情けは人のためならず」なのか？
- 目録を作る行為は、学術コミュニティや社会のためになること
- 作成者の意識の変化が必要
同時に、評価方式の転換が重要
- 入力しない利用だけの参加は望ましくない参加形態なのか？

目録データの作成

- 目録の質の確保は確かに大きな問題
 - － 目録の質の確保は誰の責任？
 - － 入力者と修正者, それでも...
- 書誌データの構造と目録の質の関係
 - － どこまで質の低さに耐えられるのか
 - － 参加館/参加者における意識のずれ
- 発生源入力といっても.....
 - － 市販のMARCだけが使える発生源なのか
 - － 発行者自身のデータは使えるのか？ 質と量

書誌データ構造とデータ交換

システム内部の書誌データ構造の変更に拙速は問題というのは全面的に賛意

- 他の図書館システムへのデータの提供は「待ったなし」
- 他の図書館システムからのデータの受け入れについてはどうか
- FRBRも含めて、いかに他のモデルとの変換を自動化できるかが鍵か？

APIの公開と課題

- API公開は世の中の流れ
 - 期待も大きい
 - 実は利用が少ない可能性も高い
 - それでも行わなければ進歩はない
- サーバ負荷の問題もあり, ある程度の制限や優先順位の設定は許容されるだろう
 - ただし, 過剰な制限は自殺行為かも...
 - データ入力と引き替えにすれば本当に参加機関のインセンティブは下がるのか？

NIIだからこそできること, 期待されること

- ・ 理想論を追い求めることも必要
 - 理想論をあきらめることも重要
- ・ 拙速にならないことも必要
 - 拙速な対応も重要
- 目録規則, 中でも目録の構造の標準化
 - 図書館以外の機関も納得できる構造は作れるのか
 - 「執念とは譲る心なり」
- 参加館以外に対するサービス
 - データ提供機関としての重要性は高まっている